疑問文における反語解釈をめぐる覚え書き

安　達　太　郎

1．はじめに

この論文では、反語的な疑問文について考えてみたい。反語的な疑問文とは、次のような文である。

(1)　何でもなく使っていた言葉に規則性がある。その法則を教わったわけではない。誰だってそうだろう。砂場から連れ出そうとした幼児が、抵抗して《行くないっ！》と叫んだ時、《ぼうや、ウチケシの助動詞はね、未然形から続くのよ。行かない、といいましょうね》などと活用表を広げる母親が想像できるだろうか。いたら、それはただの危ない人である。

(北村薫『謎物語　あるいは物語の謎』p.42)

(2)　恋愛関係というものも一つの社会関係なのですが、別に絶対に経験しなければならないようなものでもありません。生涯恋愛を経験しなかったからといって、その人の人生が貧弱なものだと誰が決めつけられるでしょうか。むしろ、強迫観念となった「恋愛」こそ、近代が生み出したイデオロギー(ロマンティック・ラブ)だとみるべきなのです。

(桜井哲夫『〈自己責任〉とは何か』p.24)

(1)、(2)の下線を引いた形式を持つ文は疑問文ではあるが、1)話し手が判断を成り立たせることができない内容に対して、2)聞き手に問いかけることで情報を引き出そうとするという〈質問〉の2つの特徴をともに持っていない。(1)は、「活用表を広げる母親は想像できない」ということを主張する文であり、(2)は、「その人の人生が貧弱なものだとは誰も決めつけられない」ということを主張する文である。

反語的な疑問文とは、話し手が、疑問文の形式をとりながらも、質問に対する答えをすでに知っており、それを聞き手に強く主張するという機能を持つものである。修辞疑問文(rhetorical question)と呼ばれることからもわかるように、

修辞技法の一種としてとらえられることが多く、文法分析のテーマとして取り上げられることは多くなかったように思うが、(1)(2)のような書きことば(文章テキスト)だけでなく、(3)のような話しことば(日常会話)においても反語的な疑問文はしばしば用いられる。

(3)「十一歳の女の子――もう十分に多感な時期よ。両親が父親の愛人をめぐってもめてることだって、当然気づいているわよ。そんな女の子が、お父さんの部下だって言って近づいてきた初対面の女性に、いきなりそんな親しげなふるまいをすると思う？　おかしいわよ」

(宮部みゆき「鳩笛草」p.232)

この論文の目的は、反語的な疑問文のさまざまな形式の特徴を記述し、その反語的な意味がどのような仕組みによって派生されるのか考えることである。2節では、記述の前提として、反語的な疑問文の特徴を示すことにする。以降の節では、真偽疑問文(3節)、補充疑問文(4節)、「だろうか」(5節)、「と思うか」(6節)、「というのか」(7節)、「ものか」(8節)の順に、さまざまな文末形式による反語的な疑問文に関して記述を行う。

2.〈反語解釈〉の基本的性質

反語的な疑問文が断定的な意味を持つプロセスは、次のような例を使うと理解しやすいだろう。

(4)「こんなにデリケートで精妙な音楽が、ほかにあっただろうか？　いや、ほかにはない」それがはじめてこの曲にぶつかった時の私の考えであり、この考えは今も変わらない。　(吉田秀和『私の好きな曲』p.235)

(4)では「だろうか」という疑いの文が反語として用いられている。疑いの文であるから聞き手に対して問いかけているわけではないが、自分自身に対する問いかけを行っていると考えることができるだろう。そして、その問いかけに対して自分自身が「ほかにはない」という断定的な応答をしているわけである。

通常疑問文が表している反語としての意味に関しても、基本的に同様のプロセスを想定することができる。(5)を参照されたい。

(5)「いったい、今さらどんな仕事について、自分の生活費と、息子の高い留学費用を捻出するだけの収入を得られますか？　ボーイ長としては一流で

も、私は帳簿一つつけられません。運転免許さえ持っていないのです」

（宮部みゆき「気分は自殺志願（スーサイド）」p.220）

この例において、話し手は聞き手に問いかけておいて、その問いかけの答えが「それだけの収入を得るのは不可能である」であることを聞き手に想起させようとしている。後続する発話がそれを裏付ける事実（ボーイ長をする以外の能力がない）を提供する役割を果たしていることにも注意したい。

ここで重要なのは、反語的な疑問文においては、〈問いかけ〉という疑問文の基本的な性質が失われているわけではないということである。むしろ、この〈問いかけ〉を媒介にして、断定的な応答を聞き手に想起させるというところに反語的な疑問文の基本的な性質があると考えることができる。このような性質を捉えるために、ここまで反語的な意味と呼んできたものを、以下では、疑問文の〈反語解釈〉と呼ぶことにする。

〈反語解釈〉は、真偽疑問文（例(6)）、補充疑問文（例(7)）ともに可能である。

(6)「断じて事故死なんかと違う。報告書によると、被害者はふだん飲まん酒をの飲み、風邪薬を通常の五倍以上も服用しとった。そんな事故死があるかい。残念ながら、うちの班の担当やなかったから、下手な口出しはでけへんかった」（東野圭吾『白夜行』p.438）

(7) こんな男たちのために、吉岡は命を落としたのか。あの時、自分たちが遭難者を助けようとしなかったら、吉岡は命を落とすこともなく、ダムが占拠されるこっともなかったというのか。だが、遭難者が近くにいると知りながら、見捨てておける山の男がどこにいる。

（真保裕一『ホワイトアウト』p.606）

また、〈反語解釈〉は聞き手の知識や文脈に大きく左右されるという文脈依存的な性質を持つ。

(8) しかし、結婚は、はたしてどの社会でも自由勝手なものなのでしょうか。なるほど、人を好きになるのは自由かもしれません。ただし相手がこちらに関心を持ってくれなければ、恋愛は成立しませんし、結婚となると、さらに壁が厚くなります。（桜井哲夫『〈自己責任〉とは何か』p.19）

(8)において、後続する文脈から、「結婚は自由勝手なものだろうか」という問いかけに対して、話し手が否定的な回答を想定していることがわかる。しかし、

問いかけられた段階で〈反語解釈〉が生じていると見るべきか、〈問題提起〉的な機能にとどまっていると見るべきかは判断しづらい。このように〈反語解釈〉は文脈依存的な性質が強く、聞き手の知識、一般的な通念によりかかりながら、問いかけに対する否定的な回答を断定的に伝えるものだと考えられる。

3．真偽疑問文の〈反語解釈〉

2節では〈反語解釈〉の特徴を確認した。〈反語解釈〉に関しては、疑問文の文型、種類によって特徴に異なりが見られるので、以下の節では、疑問文のタイプごとに〈反語解釈〉の派生に関する特徴を記述していくことにする。3節と4節は通常疑問文の基本的な文型として真偽疑問文と補充疑問文をそれぞれ取り上げる。

反語的な疑問文では、述語となる動詞に片寄りがあるという特徴が見られるが、その中でも真偽疑問文が〈反語解釈〉を派生する際にはこれが顕著であって、可能動詞と存在動詞を述語とする例がほとんどを占める。可能かどうか問いかけることが容易に不可能の解釈に転換し、存在するかどうか問いかけることが容易に非存在の解釈に転換するのであろう。

まず可能動詞述語の例を見ていく。次例は、可能動詞を述語とする事態を問いかけることによって、その動作が不可能であるという〈反語解釈〉を派生する例である。

(9)「ボクシングでわかり難(ごら)ければ、野球でも、競争でもいい。子供を誘拐して、必ずホームランを打て、と脅されれば、ホームランが打てますか？百メートルを九秒で走れ、と脅迫されればそれができますか」

(岡嶋二人『タイトルマッチ』p.37)

(10)「とんでもない。自分では素晴らしいシーズンだったと思っているくらいだ。そしてブルズは5度目の優勝を成し遂げている。これ以上のエンディングを考えられるかい」 (『Number』431)

(9)において、話し手は妥当性が低いと思われるある事態を聞き手に問いかけている。そしてその問いかけを受けて、聞き手は、脅迫されたとしてもホームランを打ったり、百メートルを九秒で走るということはあり得ず、その脅迫が異常であることを了解する。このように、聞き手を巻き込んで、ある事態が不可

能であり、あり得ないという解釈を得るプロセスを完成するというのが真偽疑問文の〈反語解釈〉の典型的なあり方だと思われる。

⑽も同様に聞き手を巻き込んだ解釈のプロセスを考えることができる例であるが、聞き手に「これ以上のエンディングはない」という解釈を導き出させるために、先行する発言においてその根拠を述べている。〈反語解釈〉は文脈依存性が高いため、聞き手がその解釈を当然のものと見なさなければ、話し手の意図に反して、通常の〈質問〉として解釈されることもあるので、反語的な疑問文には、先行文脈がその解釈を助ける例が多い。

(9)⑽のように解釈のプロセスに聞き手を巻き込むのが〈反語解釈〉を持つ疑問文の典型的なものであるが、次例はやや違いがあるように感じられるものである。⑾は、話し手の主張が前面に出て、聞き手を巻き込む力が弱くなっている。

⑾「どうしてふたりで力を合わせないんです。ぼくにはふたりがいつまでも平行線をたどっているほうが、はるかに不可解です」

「お互い人を信じなかったからここまでやってこられたんだ。四十年も五十年もそういう生き方しかできなかった人間が、いまさら簡単に宗旨を変えられるか」　(志水辰夫『あした蜉蝣の旅』p.315)

⑾は、⑽と同様、〈反語解釈〉の根拠となる事実を話し手が明示している例であるが、⑽が聞き手に〈反語解釈〉を導き出させるための根拠として機能していたのに対して、⑾では聞き手にその主張を納得させるための根拠として機能している。⑾は「ものか」に近く、⑽は「ものか」で置き換えると押しつけがましく感じられる。

⑽′？これ以上のエンディングを考えられるものか。

⑾′　四十年も五十年もそういう生き方しかできなかった人間が、いまさら簡単に宗旨を変えられるものか。

次に、存在動詞述語をとる例を見ることにしよう。ある物事が存在するかどうかを問いかけることによって、その非存在を聞き手に想起させようとする〈反語解釈〉の文には次のようなものがある。

⑿「おれは嘘をついた覚えはない。おれは一度でもおまえたちに、自分は師岡将介であると名乗ったことがあるか。おれを将介と思い込んだのは、お

まえたちの勝手だ」　　（逢坂剛『スペイン灼熱の午後』p.320）

⒀「でも、どうしてお芝居だったって分かったんです」

「そりゃあ分かるよ。わざわざ埼玉から伯母さんがガードウーマンやってるデパートまで金かけてやって来て、そこで万引きする奴がいるかい。それに、あんな修羅場なんてデパートで見たことないだろう。万引きだって分かったら《ちょっとこっちへ来てください》というのがマニュアルさ」

（北村薫「覆面作家は二人いる」p.218）

⒁は聞き手にある事実を想起させる機能を強く感じさせる例であり、⒀は話し手の主張を強く感じさせる例である。

これらの例で興味深いのは述語のテンスである。⒁は経験を表す形式「ことがある」の例であるが、過去形を用いてもよい状況で非過去形が用いられている。⒀も話題となっている事態そのものは過去に起きたものであるが、過去のある時点で生起した特定の事態として述べることを避けて、一般性の高い事態として聞き手に判断を求める表現を選択する傾向を示している。これは、一般性の高い事態の方が、聞き手が経験に即して否定的な回答を出しやすいという事情があるものと思われる。

一般性への志向は、可能動詞や存在動詞以外の述語が〈反語解釈〉に関わってくる場合にも重要な役割を持っている。この節の最後に、そのような例について見ておくことにしたい。

今回収集した用例の中で、反語的な真偽疑問文で、可能動詞や存在動詞を述語としないものはわずかに次の２例である。

⒁「雪穂は文代の死を望んでたというわけですか」

「文代が死んで間もなく、雪穂は唐沢礼子の養女になってる。もしかしたらもっと以前から、その話はそれとなくあったのかもしれん。文代は拒んでたけど、雪穂自身は養女に出たいと思ってたということは十分に考えられる」

「でも、だからというて、じつの母親を見捨てますか」

「あの娘はそういうことを平気でする人間なんや」

（東野圭吾『白夜行』p.438、一部省略）

⒂「貴様も、ご多分にもれず、株の暴落で青色吐息の口か？」

「阿呆いえ！　このおれが、こんなデフレの最中に、株に手を出したりするかい。とうの昔に手仕舞うとるがな！」

（梶山季之『赤いダイヤ（上）』p.125、一部省略）

この２例はともに、話題となっている事態そのものは過去のことであるにもかかわらず、文としては非過去形が用いられて一般性の高い表現への志向が見られることがわかる。

⒁は〈反語解釈〉と言えるのか〈強い疑念〉にとどまっているか判断が微妙な例であるが、さらに一般性の高い表現に変えると〈反語解釈〉が強化されるように思われる。⒁′は主語を特定の人物（雪穂）から一般的な人物（子供）に変えたもの、⒁″は存在動詞を述語とする文に変えたものである。

⒁′　でも、だからというて、子供がじつの母親を見捨てますか？

⒁″　でも、だからというて、じつの母親を見捨てる子供がいますか？

〈反語解釈〉が一般性への志向を持っていることが存在動詞の使用と関連していることを確認することができる。

４．補充疑問文の〈反語解釈〉

３節において、〈反語解釈〉を持つ真偽疑問文には、１）可能動詞と存在動詞を述語とするものがほとんどを占め、２）一般性への志向が見られるという２つの特徴が見られることを述べた。補充疑問文では、これと同様の特徴があるのと同時に、疑問詞が〈反語解釈〉の派生に関わることによって、この特徴が弱まっていくという傾向が見られる。

補充疑問文においては、疑問詞が全量否定の解釈に転換することによって〈反語解釈〉が派生される。しかし、すべての疑問詞が同様に〈反語解釈〉の派生に関与するわけではなく、〈反語解釈〉を派生しやすい疑問詞には傾向があるように思われる。用例の中心を占めるのはガ格名詞が疑問詞になっている例である。

⒃「えっ、俺が手伝うのか」

「当たり前じゃない。他に誰がいるのよ」　（東野圭吾『秘密』p.126）

⒄　父親は言った。「高坂さん、それは結果論というものですよ」

「結果論以外に、何が言えます？」　（宮部みゆき『龍は眠る』p.339）

⑯は疑問詞「誰」が「誰もいない」という解釈に転換し、⑰は「何」が「何も言えない」という解釈に転換している。〈反語解釈〉において、「誰」が「誰も」、「何」が「何も」という全量否定を要求する語に転換して解釈されることがわかる。また、これらの例の述語が存在動詞と可能動詞である点は、〈反語解釈〉を持つ真偽疑問文と同様の傾向として注目しておく必要があるだろう。補充疑問文においても存在動詞・可能動詞は多くの例を占めるのである。

しかし、主語名詞が疑問詞となる例では、存在動詞や可能動詞以外の動詞が〈反語解釈〉を派生する例が見られるようになる。

⑱「だれが相場師になりたいといった？」

「は？」

「わしが小豆相場をやりたいのは売り方の連中の手口が、きたないからだ……。それに義憤を感じて粛正のために、乗り出したいというとるんだ」

（梶山季之『赤いダイヤ（下）』p.465）

⑲「だとしても、問題に変わりはないよ。どんなに売り上げを上げることができても、錯乱状態を引き起こすコマーシャルなんて、誰が喜んで導入する？　うちのお偉方も、そこまで欲に目が眩んではいないさ」

（宮部みゆき『魔術はささやく』p.288）

これは、疑問詞が〈反語解釈〉の派生に関わるので、存在や可能といった述語の意味が〈反語解釈〉に関与する割合が軽減されるためだと考えられる。

「何」「誰」といった疑問詞が主語の位置で〈反語解釈〉を持つ例が多く存在するのに対して、主語以外の位置で〈反語解釈〉を持つ例は、次のような固定的な表現以外には、見あたらなかった。

⑳「もっと、してあげられることがあったんじゃないでしょうか、私」

「いいですか。暗くなった頃に萎れて帰って来る、そんな風に考えた方がいいですよ。あなたがうろたえて何になるんです」

（北村薫『秋の花』p.230）

⑳は「何にもならない」という〈反語解釈〉として固定的に用いられる表現であるが、「誰」「何」が目的語となる場合、〈反語解釈〉を持つ疑問文としては容認性がやや低いように感じられる。

㉑ a.　太郎が誰に会った？（≠太郎は誰にも会わなかった。）

b. 太郎が何を食べる？(≠太郎は何も食べない。)

これから、「誰」「何」といった疑問詞が〈反語解釈〉を派生するには、主語の役割が大きいことがわかる。主語以外の位置で〈反語解釈〉を派生するには、思考を媒介にした疑問文(「と思うか」「というのか」)を待たなければならない。

理由の疑問詞も〈反語解釈〉を派生しやすい。

(22)「休みなどはいりません。息子が何者かに監禁されているというのに、どうしてのんびりと休んでなどいられますか」

(真保裕一『ホワイトアウト』p.211)

(23)「では、逃げ道を確保しようとしているんですかね」

「馬鹿。だったら、どうしてヘリを要求してくる！」

(真保裕一『ホワイトアウト』p.414)

「どうして」は「どうしても」という形では全量否定の用法を持たないが、そのような事態や動作に理由が存在しないという解釈に転換することで〈反語解釈〉を派生するものと思われる。

〈反語解釈〉を考えるうえで、場所の疑問詞「どこ」は非常に興味深い存在である。次例のように、「どこ」は存在動詞が述語となる場合に〈反語解釈〉を持つ例が見られる。

(24)「どこに行ってたの」

一歩も上げないというように、踏ん張って母は言った。

「吉祥寺の喫茶店」

「こんな遅くまで、開いてる喫茶店がどこにありますか」

(篠田節子『女たちのジハード』p.58)

(25)「念のためによそへもかけてみたが、呼び出し音は鳴っている。どうやら話し中なのは、ゲート室の電話だけのようだ」

「馬鹿な。金子がここ以外のどこへ電話する必要がある」

(真保裕一『ホワイトアウト』p.230)

存在の場所を表す「どこ」が「どこにも存在しない」という全量否定の解釈に転換することによって〈反語解釈〉を派生するのに対して、移動動詞の着点を表す「どこ」は〈反語解釈〉に転換しにくいように思われる。(26)は質問文としては解釈できるものの、〈反語解釈〉の文としては解釈しにくい。

(26) 太郎がどこに行く？(≠太郎はどこにも行かない。)

「どこ」については、もう1つ触れておくべきことがある。形容詞を述語とする例の存在である。

(27)「何度でも言うが、ギターもセビージャも元もとわたしのものだ。自分のものを取り返して、どこが悪い」　(逢坂剛『カディスの赤い星(下)』p.352)

通常の真偽疑問文や補充疑問文では〈反語解釈〉は存在動詞や可能動詞を中心とする動詞によって派生されることが圧倒的に多いが、「どこ」をとる文において形容詞述語が〈反語解釈〉を派生する例がわずかに見られるのである。

5.「だろうか」疑問文の〈反語解釈〉

「だろうか」を文末形式とする疑問文(以下、「だろうか」と呼ぶ)の〈反語解釈〉は、基本的には、これまでに見た通常疑問文(真偽疑問文、補充疑問文)と同様の特徴を持っている。相違は、「だろうか」が聞き手に対する問いかけ性を持たない〈疑い〉の形式であるという点に求められる。

〈反語解釈〉を持つ「だろうか」が用いられるのは、主として、評論のような書きことばや心内での独り言である。これらは聞き手が存在しない点で、〈疑い〉の形式である「だろうか」にふさわしい。(28)(29)は書きことばの例、(30)は心内での独り言の例である。

(28) ユースからフル代表まで、トルシエによる一貫指導。技術委員会が良かれと思ってしたことが、火薬庫にマッチを放り込むような事態に発展すると、このとき誰が予想しただろうか。　(山本昌邦『山本昌邦備忘録』p.34)

(29)「食べるのが好き」なのだが、食べたら腹が出たとおのれを恨む。「喋るのも好き」に決まっているが、喋れば失言したと思い煩う。「寝るのはもっと好き」らしいが、寝てはもう締切に間に合わないと、うちひしがれる。私とそっくりな不幸を、常時私の三倍ぐらい抱えてくれている。こんな有り難い友達を、どうして粗末にできようか。

(檀ふみ・阿川佐和子『ああ言えばこう食う』p.8)

(30) 彼はその人物を探していた。たぶん、相当熱心に。そうでなければ、「見つけた！」なんて叫ぶはずがない。それほどの人物の顔を、簡単に見間違ったりするだろうか？　(宮部みゆき「言わずにおいて」p.114)

通常疑問文では、問いかけることによって、聞き手の知識を利用してそのような事態があり得ないという回答が〈反語解釈〉として派生されるが、「だろうか」ではそれが自問自答的になる。自分自身、あるいは自分を含む人一般に問いかけ、自分自身がそれがあり得ないという回答を出すというメカニズムによって〈反語解釈〉が派生されるのである。

「だろうか」は、聞き手が存在しない環境だけで用いられるわけではない。例は少ないが、聞き手が存在する対人的な環境で用いられる例もある。これには2つのタイプがある。

1つは、聞き手が存在するにも関わらず、話し手が自問自答的に回答を先取りして述べるといったものである。(31)その例である。

(31)「あんな古ぼけたギターに、本物のダイヤが埋め込まれていると、どこの役人が思うだろうか。ガラス玉としか思わんさ。サントスがそれを日本へ持ち帰ったことは間違いない。証拠がある」

(逢坂剛『カディスの赤い星(上)』p.298)

もう1つは、対人的な効果によるものである。(32)の「でしょうか」を通常疑問文に変えると、聞き手を非難するようなニュアンスが出てしまう。

(32)「だから和泉なんじゃないか。あいつら仲がよかったから、試験前にコピーでもしておいたのが残っていたんだろう」

「ですけれど、ノートだったら、休んで授業に出られなかったところをコピーするのは分かります。でも、自分だって持っている教科書をわざわざコピーしたりするでしょうか」 (北村薫『秋の花』p.73、一部省略)

(32)′ でも、自分だって持っている教科書をわざわざコピーしたりしますか?

通常疑問文の〈反語解釈〉は一般性への志向を持つので、その主張が当然のものであるという含意を持つ傾向がある。一方、(32)は、聞き手に対する反論として反語的な疑問文が用いられている。聞き手にとって予想外の結論を〈反語解釈〉によって主張しようとする文脈であり、ここから非難のニュアンスが生じるものと思われる。問いかけ性を持たないという〈疑い〉の文としての性質がこのようなニュアンスを回避するのに役立っているのである。

6.「と思うか」疑問文の〈反語解釈〉

疑問文には、聞き手の意見を尋ねる機能を持つものがある。

(33) a. 明日、太郎、来るの？

b. 明日、太郎、来ると思う？

(33a)は聞き手が知っていると見込まれる内容(「太郎が来るかどうか」)について問いかける通常疑問文である。一方、(33b)の「と思うか」は、その内容を聞き手が知らないという前提で、その内容の成否について聞き手の意見を尋ねる機能を持つ。

「と思うか」疑問文(以下、「と思うか」と呼ぶ)も、反語的な疑問文として重要な位置を占める存在である。

(34)「だからこそ、彼は幸せそうに金に困っていた。困ることで救われていたんだ。苦しんで、それで楽になれるはずだった。そんな彼が、どんなに金に困ったからといって強盗なんかすると思うか？」

(宮部みゆき「白い騎士は歌う」p.192)

(35)「キャッシュカードの欠点に気づいているのが、俺らだけだと思うか。そのうちに、今日俺らがやったようなことが、全国で行われるようになる。そうなったら、けちな銀行もコストがどうのこうのいうてる場合やない。すぐに切り替えてくる」 (東野圭吾『白夜行』p.189)

「と思うか」においても、存在動詞や可能動詞を述語とする例が多少目立ちはするが、(34)(35)のように一般的な動詞や名詞を述語とすることも多い。述語の制限がなくなっている点が「と思うか」による反語的な疑問文の特徴である。

次例を手がかりに、「と思うか」の〈反語解釈〉の派生について考えてみよう。

(36)「それでは、アメリカの文化とかを理解するために、こちらの会社にお勤めになっているんですか？」

「あなた、翻訳で食べていけると思う？」

(篠田節子『女たちのジハード』p.396)

(36)は、英語力で自立した生活をしたいと夢見ている女性に対して、じっくり考えれば翻訳で食べていくことが容易ではないことがわかるはずだと反語的な疑問文によって、主張する文である。(36)′との対比によって通常疑問文との違い

がわかるだろう。

(36)′ 翻訳で食べていける？

(36)′は「翻訳で食べていくのは困難である」という共通認識を背景にして〈反語解釈〉が成り立つ。一方、「と思うか」を用いた(36)は、相手にその認識が欠けているときに、推論を行ってその認識を共有するように求める表現である。

このような〈反語解釈〉を派生する仕組みの違いが、疑問詞に関する〈反語解釈〉の違いに結びつくものと思われる。(37)に見られるように、通常の補充疑問文の場合、〈反語解釈〉を派生する疑問詞には制限が見られる。移動の着点を表す「どこ」は反語的に解釈しにくいが、「と思う」では〈反語解釈〉が十分に成り立つのである。

(37) a. 君を残して、太郎がどこへ行く？(≠太郎はどこにも行かない)

b. 君を残して、太郎がどこへ行くと思う？(＝太郎はどこにも行かない)

7.「というのか」疑問文の〈反語解釈〉

「というのか」疑問文(以下、「というのか」と呼ぶ)は、相手の発話意図に関わる疑念に対して用いられる。

(38) A「次郎がずいぶん仕事を手伝ってくれたんで助かったよ」

B「えっ、次郎が来ていたっていうの？　昨日は来ないって言ってたけど」

この例では、話者Aは次郎が来ていたことを前提として会話をしている。「というのか」は、相手の発言と反する情報を得ていた話し手が、いぶかりながら確認する機能を持っていると考えられる。

〈反語解釈〉を持つ「というのか」の例を見ていこう。「というのか」の〈反語解釈〉は、話し手の想定と異なる想定を持つ相手に対して、発言意図を問いかけることによってそれがあり得ないことであることを気づかせるところから派生されるものである。

(39)「うん、まあそう」

大木がもごもご答えると、倉橋は笑った。

「考えすぎだぜ。そんな個人的なマニュアルみたいなものが、どうやって外部に漏れるっての？」　(宮部みゆき「鳩笛草」p.190)

(40)「そうか」とうめくように伸一はつぶやいた。28歳の息子に癌の再発を突然に告げられて、いったいほかにどんな言葉があると言うのだろうか。

(大崎善生『聖の青春』p.291)

相手の発言を契機として発話されることが多いので、述語の制限はほとんどなく、多様な述語で〈反語解釈〉が成り立つ。

通常疑問文が一般的な知識に基づいて〈反語解釈〉を派生するのに対して、「と思うか」と同様、「というのか」は聞き手にそのことについて考えるように求め、それがあり得ないことに気づかせるという仕組みに基づいて〈反語解釈〉を派生するものである。そのため、通常疑問文のように一般性への志向を持たず、疑問詞の制限も見られない。

(41)「馬鹿なこと言わないでよ！　敦子も文恵も殺されたんじゃない、自殺したんだから。何度言ったらわかるの？　だいたい、あたしたちが何をしたっていうのよ。そりゃ、ちょっとは汚い手を使ったかもしれない。だけど商売よ。営業よ。殺されるほどのことなんかしてないわよ」

(宮部みゆき『魔術はささやく』p.257)

(42)　花嫁衣装こそ身につけていないが、とりあえず主役を務めるイベントなんて初めての経験である。これを逃していつクッキーを焼けるというのだろう。　(檀ふみ・阿川佐和子『ああ言えばこう食う』p.159)

(41)は過去の特定の事態に対する反語的な疑問文であり、なおかつ目的語が疑問詞になっている。また、(42)は疑問詞「いつ」が用いられている点で、「というのか」が疑問詞の制限を持たないことを示している。

8.「ものか」の〈反語解釈〉

この論文の最後に、「ものか」について簡単に触れておこう。「ものか」は問いかけ性を失っており、〈反語解釈〉が固定化した形式として位置づけられる。〈反語解釈〉を持つ「ものか」の例は次のようなものである。

(43)「それでまた一儲けか」

「そんなに高く売れるもんか。材料費がかかるし、ちょっとでもプラスが出ればええほうや」　(東野圭吾『白夜行』p.52)

「ものか」は、過去形に接続しないという特徴がある。これは、「ものか」

が一般的な認識から〈反語解釈〉を派生するということを意味するものであろうか。

(44)A「太郎はその場にいたの？」

B「{a. いるもんか／b. *いたもんか}」

しかしながら、特定の事態にも用いられるというのが「ものか」の興味深い点である。次のような対比を参照されたい。

(45)「それで、彼は出された料理を食べたの？」

「{a. 食べるもんか／b. ??食べるか}」

(45b)からわかるように、真偽疑問文は一般性への志向を持つために特定の事態に対しては用いにくい傾向がある。それに対して、「ものか」は特定の事態に対しても用いることができる。一般的な認識を媒介に特定の事態に対して〈反語解釈〉を派生するのが「ものか」の特徴であると考えられる。

「ものか」は述語や疑問詞の制限についても興味深い傾向を示す。述語の制限に関しては、ほとんど制限らしい制限が見られないと言える。形容詞や名詞を述語とする反語的な疑問文もしばしば見られるのである。

(46)「でも、かわいそう。家の都合で夢を捨てるなんて」

「かわいそうなもんか。若社長なんだよ、あいつ」

（篠田節子『女たちのジハード』p.452、一部省略）

(47)「あら、気になりましたわよ。母親ですもの」

「あなたのどこが母親なものか！」　（宮部みゆき『蒲生邸事件』p.380）

これらは、直前の相手の発言の一部を取り込んで「ものか」を付加するといったものである。

疑問詞に関しては、通常の補充疑問文においては、目的語の位置には疑問詞が現れにくいという制限があった。「と思うか」「というのか」はこの制限がないことをすでに見たが、「ものか」はこの制限が強いように思われる。

(48) a.　誰が来るものか。

b.　*太郎が何を食べるものか。

c.　??太郎がどこへ行くものか。

9．おわりに

この論文では、さまざまなタイプの疑問文に関して、〈反語解釈〉が派生される場合の特徴を概観してきた。十分な議論はできなかったが、述語や疑問詞の制限、テンス形式などに見られる一般性への志向といったことが疑問文のタイプによって異なることを述べた。〈反語解釈〉を把握し、その派生のメカニズムを明らかにすることは容易ではないが、解明への糸口をいくつか提示することができたと思われる。

参考文献

安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

今井邦彦・中島平三(1978)『現代の英文法5　文Ⅱ』研究社

阪倉篤義(1957)「反語について――ヤとカの違いなど――」『万葉』22〔阪倉篤義(1975)『文章と表現』(角川書店)に再録〕

日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4　第8部モダリティ』くろしお出版

宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『新日本語文法選書4　モダリティ』くろしお出版

山口堯二(1983)「疑問表現の情意」『大阪大学教養部研究集録(人文・社会科学)』第31輯〔山口堯二(1990)『日本語疑問表現通史』(明治書院)に再録〕

用例の出典

逢坂剛『スペイン灼熱の午後』講談社文庫、逢坂剛『カディスの赤い星』講談社文庫、大崎善生『聖の青春』講談社、岡嶋二人『タイトルマッチ』講談社文庫、梶山季之『赤いダイヤ(上・下)』集英社文庫、北村薫『謎物語　あるいは物語の謎』中公文庫、北村薫「覆面作家は二人いる」『覆面作家は二人いる』角川文庫、北村薫『秋の花』創元推理文庫、桜井哲夫『〈自己責任〉とは何か』講談社現代新書、篠田節子『女たちのジハード』集英社文庫、志水辰夫『あした蜉蝣の旅』新潮文庫、真保裕一『ホワイトアウト』新潮文庫、檀ふみ・阿川佐和子『ああ言えばこう食う』集英社、東野圭吾『白夜行』集英社、宮部みゆき「鳩笛草」『鳩笛草』光文社、宮部みゆき「気分は自殺志願」『我らが隣人の犯罪』文春文庫、宮部みゆき『パーフェクト・ブルー』創元推理文庫、宮部みゆき「言わずにおいて」『返事はいらない』新潮文庫、宮部みゆき『魔術はささやく』新潮文庫、宮部みゆき「鳩笛草」『鳩笛草』光文社、宮部みゆき『蒲生邸事件』文春文庫、山本昌邦『山本昌邦備忘録』講談社文庫